

グローバルCOEプログラム「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」  
「コンフリクトの人文」セミナー 第55回

南部アフリカにおける市場と社会変容  
—植民地期モザンビークにおけるアルコール市場を事例に—

講師：網中 昭世

(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所／日本学術振興会特別研究員(PD))

要旨：

モザンビークは紛争後の平和構築や経済復興という文脈では「優等生」と評価される。しかし、近年、国内では選挙結果の不透明性や食糧価格の値上げに対する暴動が発生し、南部アフリカ域内では南アフリカで就業する移民労働者に対する外国人差別という形でモザンビーク人に対する暴力が生まれている。これらの暴力は東西冷戦期の硬直した二項対立とは対照的に、今日の流動化した社会の中で生じた複合的な対立関係の末に顕在化したものとして捉えることができるだろう。この問題をより深く理解するためには、東西冷戦期の硬直した状況によって覆い隠されていたもの、つまり、東西冷戦期以前に形成された社会経済の在り方とそこに内在する矛盾を的確に捉えることが必要となる。こうした現代的関心から、本報告は植民地期の当該地域における社会変容に関する考察をもとに、現代モザンビークおよび南部アフリカの特性について考える。

講師紹介：

日本学術振興会特別研究員(PD)として東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所に所属。おもな研究テーマは、モザンビークを中心とした南部アフリカ地域経済構造の形成と社会変容。近年の業績に「南部アフリカにおける支配の重層構造—ポルトガル領モザンビークにおける南アフリカ金鉱業の労働力調達—」(北川勝彦・井野瀬久美恵編『アフリカと帝国—コロニアリズムの新思考に向けて—』近刊)、「モザンビーク南部の移民送り出しと社会的影響の地域的多様性—植民地期のアルコール市場をめぐる競合と排除」(『アフリカ研究』2010年)、「モザンビークのエネルギー資源開発をめぐる史的考察」(『アフリカレポート』2007年)、「ポルトガル植民地支配とモザンビーク南部における移民労働」(『歴史学研究』2007年)などがある。

日時：2010年10月28日(木) 16:30～18:30

会場：大阪大学大学院人間科学研究科(吹田キャンパス) 東館1階 106 (参加無料)

東館は万博外周道路側の別館です。大阪大学大学院人間科学研究科(吹田キャンパス)への交通アクセスは<http://www.hus.osaka-u.ac.jp>をご参照ください。

お問い合わせ先：

大阪大学大学院人間科学研究科人類学研究室

e-mail: [globalra@hus.osaka-u.ac.jp](mailto:globalra@hus.osaka-u.ac.jp)

電話 06-6879-8085/06-6877-5111

